

## 長野市立博物館の開館一周年にあたって

永い間市民のみなさんとともに完成を待ちわび、そして、胸をとどろかせて開館のテープを切った日が昨日のように思われます今、早くも12万人ものご来館者を迎え一周年の開館記念の特別企画展“はにわの世界..”を開けますことは喜びにたえません。

思えば、長野市が市立博物館建設を市民のみなさまのご要望にそって決定し、具体的にその建設のために動き出したのは昭和48年8月、多くの有識者のご参画を得て設置した“博物館建設調査委員会..”を発足させたときのことでした。それ以来約8年間、いかにして市民のみなさまのご要望を具体化するかを検討した貴重な期間でした。その間、館の基本的な内容については、県内は言うに及ばず、地方都市の博物館としては例を見ないような研究機関としての学芸員室の設置と、その研究の成果を発表するに十分な規模の展示場を持ち、かつ総合博物館として自然・人文科学の両分野にわたる内容とする旨の基本計画をまとめられました。

いっぽう、その答申の内容にふさわしい館の建造物を建築するための準備は、建築学会あげてのご協力で、公共建築物としては初めての設計競技からスタート、結果としては日本一の評価を得るほどの立派な建物ができ上がりました。さらに、博物館の最も大事な展示室の製作については、永年にわたって進められて来た学術研究の成果を展示するため、地元の研究者のみなさんは言うに及ばず、博物館学の権威者の御指導を得て、目を見はるような展示室を完成され、まさに地方の時代にふさはしい“文化創造の場..”が完成した訳でございました。

おかげさまで、当初予想しました年間入館予定者5万人を倍以上うまわるみなさんをお迎えできましたが、この間特に誇りに思いますことは一片の展示資料の破損もないということでございます。これは、ご来館いただいたみなさん一人ひとりの意識と公共文化施設への関心の高さを示すものであり、まさに文化都市としての証しともいえるものであります。

私どもの夢は、未来永劫平和で希望に満ちた生活を送れることです。過去に体験した多くの出来事を基礎に、新しい世界を築いていくことが必要です。長い長い自然と人間とのかかわり、その中でくり広げられた人間同志の葛藤、そのすべてが私たちの未来へのいしずえとなってきました。どうか、より多くのみなさんがこの博物館を通して生きることへの夢を大きく持たれることを希望いたします。

最後に、今回の特別企画展開催に当ってご協力いただいた東京国立博物館はじめ多くの方々に感謝申し上げますとともに、東日本では最も多くの資料を一堂に展示することができた“はにわの世界..”に一人でも多くの市民のみなさんにひたっていただけることを念じてご挨拶にかえます。

昭和57年9月23日

長野市長 柳 原 正 之

## 特別企画展「はにわの世界」開催の趣旨

長野市立博物館は、ここ長野市小島田町八幡原史跡公園内の自然のいとなみの盛んな地に建てられ、市民のみなさんの心の憩いの場にふさわしい一年を過ごせましたことは感激にたえません。

この博物館は、長野盆地の歴史と生活を主題として、常設展示室と特別展示室、さらに天体学習室等を活用して、展示学習の場としております。通常公開している常設展示室では、長野盆地の生い立ちから人間がこの地に住みつくまでにくり広げられた、長い地球の歴史を学習していただく自然科学の部門から始まります。

周囲を山にかこまれた狭い平坦地には千曲川と犀川が落合って大河となっていますが、この盆地とそのまわりは、地質や地理学などの研究資料が豊富で、学問的には恵まれた地となっております。中でも、第三紀に形成された不安定な地質におおわれている西側山地は、地震や集中豪雨などにより起こる地<sup>すべ</sup>り常襲地帯であり、さらに、有史以来何度もくりかえされた被害地震の体験もあるこの地方としては、体験学習も加えて集中的に地震の展示をしていることを特徴としています。

2万年ほど前から始まったこの地域での人間の歴史の展示から以後は人文科学の部門に入ります。ここでは、まだまだ研究を深める必要の時期もあり、新しい資料の発掘を待たれるものもありますが、この展示資料を通して、日本での、広くは世界での人間の歴史を学習する手がかりを得るためには、最低限の展示はできています。特に、食物採集生活を主としていた時代から、生産する社会へとかわって来た弥生時代の資料については、村落の形成の過程を実際に学習できる遺跡の模型もでき、さらに特徴的な群集墳などの古墳時代の遺跡、そして奈良時代以降、善光寺とともに開け、やがて長い封建制の時代を経過して現代へと移り変わった歴史部門の展示は、途中、中央文化の摂取の主役であった寺院の姿や戦国時代の合戦の様子などの展示を加えて、この地方独自の文化の学習をしていただいています。

最後の民俗部門の展示は、具体的に実物の資料を並べることによって、来館者の知識や体験を館の研究の素材としていくねらいも兼ね、民家を移築したり、祭の山車を組み立て展示して、来館者と博物館との距離をとりはらう工夫をしているところです。

以上の常設展示は、その資料範囲を長野盆地とその周辺に限定し、自然と人間とのかかわりや、人間の生活などを学習していただいています。そのため、もっと広く深く学習するためには十分でない面も多くあります。それは、時代とともに人間の関係が広がり、この盆地から広くは世界的なつながりへと展開していきます。その人間の文化を追求するためには、どうしてもより多くの外へのつながりを学習する必要があるからです。

当館では、常設展示とのつながりをより広く外に求め、館の展示を補うために実施しているのが、特別展示室を使つての企画展です。この一年間に、開館の際は農耕文化とともに生まれた“機織り”の歴史を展示し、そして今にまで伝えられている糸どり、染色、機織りの全行程を、実演を主体に展示し、さらに夏祭りの時期に合せて、町と村に伝わる“長野の祭り”を、神楽などの実演も加えて開催して来

ました。これは、学芸員室での身近かな文化遺産の研究の成果を、常設展示に補足する部分として発表したものです。

ここへ加えて、今回の特別企画展は、長野盆地では、ほとんど体系的に見ることのできない古墳時代のはにわ（埴輪）を展示し、弥生時代からできた村落社会が、大和政権へとつながりをもっていく段階を、全国的な規模で学習していただくものであります。

弥生時代は、北九州に伝わった水稲栽培を中心とする農耕経済の文化を持った人たちがやがて近畿地方などを中心にして、全国へ農耕文化を伝えていった時代です。長野盆地にあっては、1世紀初頭から各地に点在する遺跡も発見され以来、200年後には箱清水式土器の盛行を見ます。その間、千曲川の自然堤防上などの恵まれた環境の地には多くの村落が発達、ようやく定住する人間の歴史が始まります。さらに、箱清水式土器の分布圏を追いますと、奈良時代に信濃国と呼ばれる広い地域にまで分布し、その上、上毛と呼ばれる関東地方の北部にまで広まっていることが確認されています。

これは、農耕を中心とし定住した人々が村落を形成し、その村と村とのかかわりがさらに広がり、支配関係も強化されながら国家を形成していく段階を見れるのがこの弥生時代といえます。

これに続く古墳時代は、畿内地方を中心にして勢力をたくわえた大和の豪族が、各地の豪族を支配下におさめ、国家形体をつくり上げていく時代です。

この地域では更埴市森將軍塚古墳、市内篠ノ井石川柳將軍塚古墳など、古墳時代前期に当たる4世紀代から強大な財力と権力を持った豪族がこの地方を支配していたことを物語っている古墳が見られ、これは、弥生時代から発達した農耕を中心にした村々をまとめ、中央の大和政権とのかかわりを強く持っていたことも思わせます。この、村と村、村と地方、さらに地方と中央とのかかわりを追求するため、古墳やそこに残された遺物を研究する必要があります。

この難問を解明する方法の一つに、はにわを通し古墳にかかわる祭式を研究し、古墳時代社会を再現する方法があります。長野盆地はじめ県内でははにわの出土例が少く、総合的にこれを知る機会も少ないので、この際全国的な規模ではにわを見る企画を設け、国が誕生した様子を、身近かに理解していただく特別な展示を計画しました。

展示の内容は、瀬戸内の吉備地方に始まったといわれるはにわの源流から、畿内で発達、東海地方を経て東国で盛行するはにわ文化の歴史と、さらに、古墳の上でくり広げられた権力者葬送の祭式や、そこに見られる古墳社会の人々の生活を思わせるはにわ群の展示をし、はにわの世界を再現いたします。

今回の企画には、東京国立博物館・群馬県立歴史博物館等多くのみなさんにご協力を賜りました。この御好意を十分に生かし、当館創設の目的である“新しい市民文化の創造、のために役立てる所存でございます。ご協力に深謝申し上げます。

長野市立博物館長 掛川 一 夫